

結城紬デザインのフォーマル化研究(第1報)

椎名美佳子* 望月 政夫*

1. 緒 言

洋装化の進んだ現代社会においては、キモノを着る人を見かける機会が少なくなってきた。日本の民族衣装としてのキモノの役割は、フォーマルな場所での装いとしての需要が大半を占めてきているようである。しかし、その一方で結城紬の用途は、カジュアルな場所での装いとされている。(表1)

製造過程の一部始終が人間の手作業であるために最高級品として市場に出回るが、用途範囲が狭いためなかなか消費者に受け入れてもらえないのが現状である。

(図1)

そこで、マーケットの拡大を図ることを目的として結城紬のフォーマル化を行うこととした。

2. 調査方法

まず、フォーマル化をするにあたり「なぜ結城紬がフォーマル着として通用しなかったか。」という原因の解明を行うことにした。

- (1) 文献調査
- (2) 業界調査(産地問屋/4企業7名,生産者/12名)
業界関係者(計19名)を数グループに分け、グループごとにディスカッションを行った。

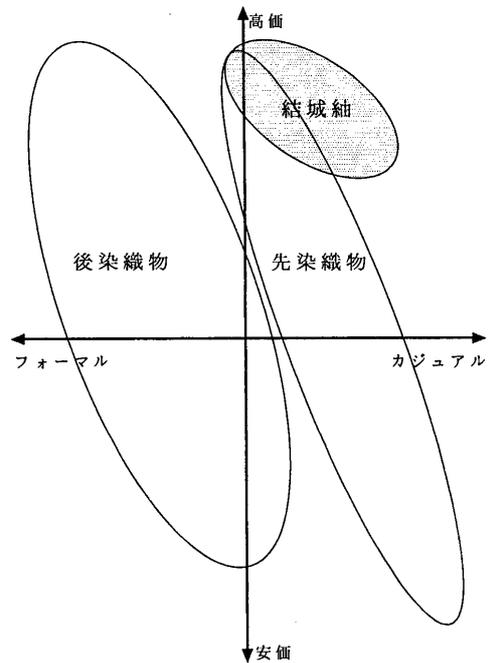


図1 価格と用途

表1 キモノの用途と種類¹⁾

用途	着物の種類	
	既婚者	未婚者
礼装 (正装)	・染め抜き日向五つ紋付黒留袖 ・ “ 色留袖	・振袖
準礼装	・染め抜き日向三つ紋付色留袖 ・染め抜き中陰三つ紋付色留袖 ・ “ 色無地	・染め抜き日向(または中陰)または縫い、一つ紋付色無地 ・ “ 江戸小紋 ・格調高い訪問着
略礼装	・染め抜き中陰(または日向)一つ紋付色留袖 ・染め抜き日向(または中陰)または縫い、一つ紋付色無地 ・ “ 江戸小紋 ・格調高い柄付けの訪問着	
おしゃれ着 パーティー着	・軽い柄付けの訪問着 ・ “ 付けさげ ・織り絵羽 ・付けさげ小紋	
軽いパーティー着 軽い外出着	・小紋 ・紋なしの色無地 ・御召	
街着	・紬 ・ウール ・木綿	

*繊維工業指導所

3. 結果及び考察

2.の調査を行った結果、結城紬がフォーマル化されなかった理由には4つの背景が絡んでいることが明らかになった。

3.1 歴史的背景

紬織物の起源は、養蚕農家が商品にならなかった屑繭を利用して紬糸としたものを、農閑期に自家用の普段着として作られたところにあるといわれている。そのため、現在では屑繭を使用する商品が少なくなってきているにもかかわらず、歴史的背景からくるマイナスのイメージが拭い去れずにいる。

しかし、この歴史的背景をマイナスからプラスのイメージに転じることが、結城紬のブランドイメージをより一層高める要素と成り得る。

3.2 素材

織物の光沢の差は、経・緯方向の糸の(a)大きさ、(b)撚数、撚形、(c)密度の違いによる表面構造の差に起因している。結城紬に使用されている手紬糸には撚りがかかっていない。そのために繊維方向が不均一であり、布に織りあげた際に紬生地は、入射光を分散して反射する表面構造となる。そして、その反射光が分散されることが、紬生地の表面には光沢が見られない原因である。

この光沢の有無は、キモノの用途をフォーマルとカジュアルに分別する1つの基準となっているようである。

しかし、結城紬の最も重要な特徴である布の風合いについては、手紬糸が大きな役割を果たしているため、光沢を出すことを目的に安易な糸使いはできない。そのため、新しい製品を企画するにあたっては、糸の選定が重要なカギとなってくる。

3.3 緋と柄付け

当産地において多用される亀甲緋、十の字緋などは、一つの緋の単位面積がわずかであり、その集合体をもって絵柄を表現しても、後染め加工を施したものに比べると絵柄としてのインパクトが弱く、晴れの席での華やかさに欠ける。

緋の柄付けも、生産効率の問題から、総柄もしくは飛び柄が主流である。絵羽調のものも生産はされているが数とするとごくわずかであり、生産効率が悪いためリスクも大きくなる。

このことからわかるように、先染め織物に対し、後染め織物の方が着物の格が上とされるのは、柄付けに制約がなく自由に絵柄が施せるところにあるといわれる。

3.4 流通

和装業界には特有の流通機構がある。(図2)

生産者から品物が産地問屋に集約されると集散地问屋を経由して、全国の小売店へと流れていく。

産地問屋も過去に何度か「結城紬のフォーマル化」を提唱はしたものの、数多くの反物を扱う小売店サイドでは、現在フォーマルが用途とされている商品の販売に差し障りがあるとして、受け入れてもらえないのが現状である。

このような理由から、消費者の意識の啓蒙をするにあたっては、小売店サイドからの情報発信はとても困難なことである。よって、産地から消費者への直接の情報発信が一番有効な手段であると思われる。

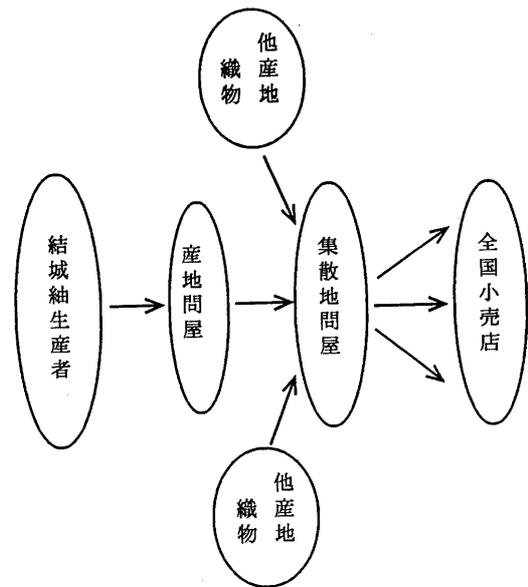


図2 結城紬の流通機構

4. 結 言

ニューヨークでは、スポーツシューズであったはずのスニーカーが1つの流行によって、オフィスシューズとしての用途も確立した。

洋服の世界では、カジュアルとフォーマルの領域は不明瞭なものであり、時代とともに変化をしていく。和服も、日常着とされていた頃には、時代ごとの流行があった。訪問着や付け下げなどは、そのころに生み出された新しいキモノであったが、今では、昔に生み出された流行を受け入れるにとどまり、新たな流行を生み出すことがなくなった。

しかし、ここ数年のゆかたブームを見ても分かるように、決して若者がキモノへの関心を失ったわけではない。ただ、キモノに関するしきたりが多いがゆえに、束縛を嫌う若者には受け入れられないのだろうと思う。そして、そのしきたりは、結城紬がフォーマル着として通用しなかった要因の1つでもある。

スニーカーがオフィスシューズに転じたのと同様に、キモノにも自由な発想が取り込めれば、結城紬のフォーマル化もあり得ることを確信した。

参考文献

- 1) 美しいキモノ90'秋号:婦人画報社
- 2) 木村孝ら:紬のおしゃれ着と帯:婦人画報社
- 3) 木村孝:木村孝のきもの・しきたり事典:婦人画報社
- 4) 荻原清治:絹撚糸論
- 5) 深田宏ら:きものつれづれ:PR現代社